はたらく女性のフロア通信

発行日　2016年6月25日

NO. 27

はたらく女性のフロアかながわ（ＷＷＦＫ）

〒221-0855　横浜市神奈川区三ツ沢西町８－２５－２０３　本間重子気付

電話／FAX　０４５（３２３）０６５３　E-mail　wwfk@hotmail.co.jp

HP　http://wwfk.jimdo.com/

東芝は職場復帰を認めよ！

『WWFK通信』26号で電機産業のリストラについて日立を中心に掲載しました。今回、４月25日に東芝のAさんからお話を聞きました。

▼突然解雇

Aさんは、東芝のソフトウエア技術者として20年間勤務し、東芝人材開発株式会社（HRD社）に2005年移籍、同社の東芝テクニカルスクール（技能訓練校、横浜市港北区）で学科講師・講師業務のまとめ役を担当してきました。しかし、2014年4月に校長が交代すると、新校長による執拗な退職勧奨、セクハラ・パワハラ面談が始まりました。グループミーティングから排除、面談で「仕事と子育ての両立は無理、会社をやめたほうがよい」との嫌がらせ。研修内容の改善をとのメールに校長や副校長が「HRDの信頼を失墜させた不適切メールだ」と、パソコンを取り上げられ、業務禁止と反省文の提出を命じられました。このような状態が1年続き、「反省がない」と、2015年11月末、突然解雇されました。現在、電機・情報ユニオンと一緒に職場復帰を求めて会社と団体交渉を行っています。

お話の中で、東芝がAさんをリストラのターゲットとして狙いをさだめ、執拗ないやがらせをしている実態が分かりました。しかも、その嫌がらせが計画的で、罠におとし入れる卑劣なやり方です。

ＷＷＦＫは、Aさんを応援する方法として、東芝の門前でまくビラにメッセージを書いて、社会的に糾弾していくことにしました。メッセージのいくつかを紹介します。

★昔話のような錯覚

旧態依然の大企業の体質にはあきれた。昔話をしているような錯覚を覚えた。儲けのためには働く人の人権などは邪魔なのだ。自民党の改憲草案では「個人の尊厳」が消えている。国益・企業の利益のためには「個 人の尊厳」は邪魔、だから抹殺しようとしている。この闘いは単なる職場復帰闘争ではなく、財界や国の攻撃を跳ね返す闘いだと思う。団結し粘り強く闘えば必ず展望が開かれると確信している。

★労働権を取り戻そう

東芝を解雇されたＡさんのお話を聞ききました。どうしてこの人が解雇されるのかわかりません。彼女は男女雇用均等法の一期生。希望を持って職場に入りました。責任感強く、仕事に邁進したはずです。その為に自分の意見を述べ、周囲の人たちの仕事振りに厳しい面もあったと思います。しかし、そんなことでパワハラを受けたり、仕事を奪われたり、解雇になることはあり得ません。東芝は「人を大切にします」と言っています。本当ですか？彼女は職場に戻り、定年まで働く事を望んでいます。労働の権利を取り戻しましょう。

★労使の健全な話し合いによる解決を

世界の東芝の関連企業で考えられない「いじめ」がされていることにびっくりです。労働者にとって安心して働ける環境があって、働き甲斐や生きがいを感じます。一人一人の労働者の労働により企業活動が成り立っていると思います。企業の社会的責任は、国連グローバル・コンパクト（注：４ページ参照）でも求められています。労使の健全な話し合いによる解決こそ、民主主義社会の基本です。

WWFK第8回総会＆お話し

日時 2016年7月21日（木）18時～20時

場所 かながわ県民サポートセンター6階601ミーティングルーム

内容 ①WWFK第8回総会 18時～19時

・2015年度活動報告と2016年度活動方針（案）

・2015年度会計報告・会計監査報告と2016年度予算（案）

②お話し 19時～20時

「奄美群島の女子挺身隊」

大谷 葛代（つたよ）さん（元横浜市従婦人部）

政治を変えて戦争を止めよう ９条
神奈川大集会2016in湘南ちがさき

白井 洸子 （会員）

６月４日の会に行ってきました。午前の分科会は、「造ってはいけなかった原発」元東芝の原発の設計者だった後藤政志さんは「福島で起きたことはほんとに運が良くてあれだけで済んだので、もし燃料が下に落ちていたら、首都圏もやられていた。今もって原子炉の中がどうなっているのか見ることもできていない。なぜ今原発を再稼働するのか、多分大丈夫だろうでやっている。恐ろしいことだ。誰も責任をとっていない、原発はやめるしかない」と話された。本当に怖い話である。早く原発をやめる政府を作らないと日本は破壊されてしまうと改めて痛感した。

午後は、９条の会の事務局長の小森陽一さんが力強く、現状を話された。60年安保のときは労組や学生の動員が中心であったが、今の反安保法制の運動は一般の市民が自発的に一人一人集まっている新しい市民運動で、この力をさらに広げていこうといわれた。

さらに、60年安保のあとの政治のうごきを歴史的に話され、今、野党共闘ができて、新しい時代にはいってきた。小泉、安倍と争点隠しで選挙をし、勝つと特定機密保護法や、安保法制など争点になかったものを通してきた。今度の参院選でも破綻したアベノミクスを争点にし、勝てば、改憲へと進むのが明らかである。参院選に向けて頑張ろうと、胸にすとんと落ちるような話をした。

久しぶりに力をもらえる話でうれしくなって、本（★）を買ってサインしてもらい、小森さんと握手をして、帰りに喫茶店で読んでしまいました。

★『あきらめることをあきらめた 戦後71年目のデモクラシー』小森陽一、黒沢いつき、元山仁士郎、西郷南海子共著（かもがわ出版）

君嶋ちか子がゆく④
・・・神奈川県議会報告

ネットで情報発信も続けられ、12日にはツイッターでキーワード「神奈川県議会」は３万件に達しました。会議開催が深夜に及んでも傍聴はもちろん、外でのスタンディングとコールも続けられました。

このように市民の注目が集まる中で、各会派は、代表質問封じの規則変更を行うことができなくなり、最悪の事態は回避されました。

その代わりに出されたのが「共産党の議会運営に対して猛省を求める」とする決議。その中には、「再びこのような事態を招けば交渉会派を辞する覚悟を」との記載もあります。

▼議会本来の議論を▼

この決議をめぐり共産党は、「ミスが議会を侮辱するような重大なものでない限り、議会運営に反映させるべきではない。また他の会派であれば問題にならないようなことを、共産党については執拗に取り上げることは、共産党の権利制約を狙うもの」と反対討論を行いました。

一連の動きは、神奈川県議会の異常な姿を浮き彫りにしました。今後、県民要求を県政に反映させるという本来的議論がしっかりと行える議会をめざし、引き続き奮闘したいと思います。

▼神奈川県議会、共産党から代表質問権を奪おうとする動き▼

3月24日、共産党は本会議反対討論において、請願に対する委員会審査結果に賛成とすべきところ、誤って反対と表明しました。但し、直後に訂正を行い、採決も正しく行っています。

このことを取り上げ、4月11日の議会運営委員会(議運)は「共産党は未熟だから、代表質問は成熟するまで控えるべき」とし、すべての会派がそのための協議入りに賛成しました。

共産党県議団は、記者会見や声明などで「多数会派が、有権者の付託を受けた議員の発言権を奪うことは、議会制民主主義を否定するもの」と表明し、様々な働きかけを強めました。

▼多くの市民が▼

これに対し、多くの市民から「民主主義破壊は許さない」と抗議の声が上がりました。

そのことを決める議運開催の5月11～12日、朝からプラカードを掲げたスタンディングが県庁で行われ、たくさんの方が傍聴にも駆けつけてくれました。

世界遺産アウシュビッツ ユダヤ人絶滅強制収容所とは

佐久間由美子（会員）

◎ポーランドへ

4月6日～11日、ポーランドの第2の都市クラクフと首都ワルシャワに行った。ナチスはクラクフから約30km離れたオシフエンシムという町に3 つの収容所を建設、そのうちの2つ、アウシュビッツとビルケナウ収容所が保存・展示されている。入場料は無料（外国語のガイド料などは有料）、教育施設として位置付けられていることの意味は大きい。若い人、青少年が団体で大勢来ていたし、平日なのに込み合っていた。

◎アウシュビッツ収容所

アウシュビッツ収容所は元ポーランド軍の兵舎を転用しているため、建物も頑丈なレンガ造り、一方ビルケナウ収容所は一部レンガ造りだが、ほとんどは収容者に建設させた木造、隙間だらけの作りで馬小屋同然、当然建物は大部分崩壊し、レンガ造りの暖炉と煙突だけが残り、広い敷地内に規則正しく立っている。（一部復元され見学できる）ここに約130万人が連行され、そのうちの約110万人が殺害されたという。

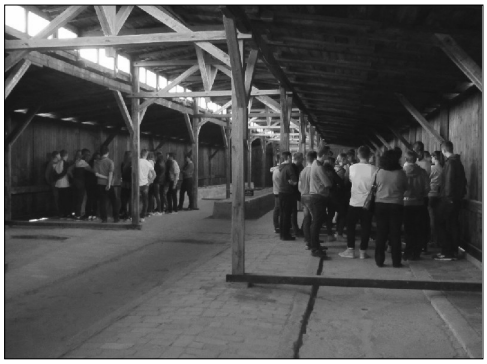
ナチスは効率的に収容者を支配するために、収容者が「団結」しないよう様々な策を用いた。収容者を、ユダヤ人・政治犯・同性愛者などに「分類」してマークをつける、ナチスへの協力度に応じて優遇。また、ビルケナウでは敷地を高いフェンスで仕切り、グループごとに収容、他のグループと接触できないようにするなど、差別と分断により、収容者が「自主的」に上下関係を築くことで、最低限の労力で支配できる体制を作った。

◎アウシュビッツを訪れる意義

今回のツアーでよかったのは、ただ1人の日本人ガイド中谷剛さん（注）の話を聞けたことだ。アウシュビッツを訪れる意義を国際的な視野から解説してくれたことはもちろん、日本人としてどう考えるべきか、どうするべきかと問いかけ、日本軍もかつては同じようなことをした、中国ハルピンの「731部隊」にもぜひ行ってほしいと言う。来訪者は若い人が目だっただけでなく、イスラエル軍の兵士が制服で、ユダヤ教徒が正装で、あるいはユダヤの星をプリントした旗をまとって訪れていた。その意味するところや、自国に帰ればかつては敵国、現在も敵国という関係の人々が、同じ思いで見学し、行き交っている。その中の日本人がどう思われているのか、またどうふるまわなければいけないのか、日本国内にいただけでは考えられないことに思いをはせることになった。

◎ワルシャワ蜂起博物館

もうひとつの収穫はワルシャワ蜂起博物館だった。1944年8月1日から約6週間、革命地下政府を作りナチスドイツ軍に抵抗した市民の闘いの全てが分かる博物館は見ごたえがあった。この戦いでワルシャワは壊滅的な打撃を受けるが戦後市民の力により、破壊されたレンガを一つひとつ集めて積み上げ、元の町並みを再生した旧市街の話しは感動的だ。（日本語音声ガイドあり）



◎ビルケナウ収容所、木造のバラック内部、中央にあるのがトイレ。青年の団体がいくつも見学に訪れていた。

◎アウシュビッツ収容所、銃殺が行なわれた「死の壁」、花束がたくさん供えれていた。

（注）アウシュビッツのガイドはすべて公認で、試験があるようです。運営の趣旨に沿ったガイドが求められているとのことです。日本人は1人だけで、観光ガイドブックにも写真入りで紹介されている方です。

第61回神奈川県母親大会

8月7日（日）10時～16時

神奈川学園中学校・高等学校

午前中：分科会 午後：全体会

WWFK企画

らいてうの家10周年イベントの旅

9月17日（土）～18日（日）

17日はらいてう講座「式部からのメッセージ」に参加し、別所温泉泊

翌日18日は「無言館」を訪ねます。

◎詳細は後日

映画が好き　「裸足の季節」

池田　資子（会員）

イスタンブールから1000キロ、トルコの小さな村に暮らす５人姉妹。学校帰りの少女達が笑い、走り、海で遊び、森の中を抜けていく。キラキラと輝く時間は続くかに思われたが、隣人の告げ口で、大きな変化が生じる。

両親を失った姉妹は祖母と叔父のもとで生活している。海で男子と騎馬戦をしたことが、「ふしだら」「売春婦のような」と叱責され、処女検査まで受けることになる。姉妹は少女らしい洋服、アクセサリー、化粧品、携帯電話、パソコンを没収され、家の中に閉じ込められる。彼女達は「くそ色」と呼ぶ地味な洋服を着て、学校にも行かず、料理掃除などの花嫁修業に明け暮れる日々が続く。

窓から脱出しボーイフレンドに会う長女。末っ子のラーレはサッカー観戦を叔父に申し出るが、男だらけのサッカー場に行くことは認められない。ところが観客の暴動により、女性客のみの試合が行われることになり、外出したい姉妹は揃って脱出を試みる。抑圧する者とされる者。姉妹が抜け出そうとする度に鉄格子は高くなり、門扉は固く閉められる。

しかし、悶々と過ごす姉妹が下着や水着姿でじゃれ合い寛ぐ姿には閉じ込めることが出来ない若さとエネルギーがある。それが不安でならない大人たちは、早く結婚させてしまおうと考える。お披露目と言って姉妹を連れ歩き、見合いをすすめる。息子に代わってプロポーズする父親、本人の意思とは関係なく結婚話が決まる。女性を妻・母として縛り付ける結婚。次々に姉たちが結婚する中で、ラーレはある計画の準備に取り掛かる。

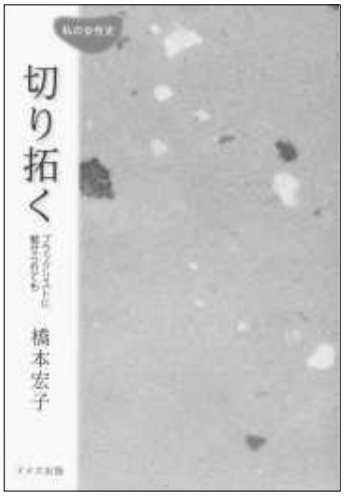
監督はトルコ生まれの女性（38歳）で、「同じ様な経験がある」と言う。現代も根強く残る女性に対する因習に、映画という表現で抗している。内容は重苦しく信じ難いが、観終わってさわやかな気分になる。原題の「Ｍｕｓｔａｎｇ」とは野生の馬。風に揺れる姉妹の長い髪が馬のたてがみを思わせる。自由に未来へ向かって駆けてゆけ。

本だな

『切り拓く－ブラックリストに載せられても』

橋本 宏子 署

本間 重子（会員）



向かい風を受け止め、自ら歩む道を「切り拓いて」きた橋本宏子さんの、生い立ちから今日に至る自分史です。

女性の働く権利を確かなものにするために、「ブラックリストに載せられても」女性労働の現場に飛び込み、解雇され闘い、自己形成していきながら、結婚・仕事・子育てを通して女性労働問題の研究を深めていく過程が描かれます。

60年安保闘争直後に結成した横浜市従婦人部の学習会に橋本宏子さんを招き、「婦人の働く権利と保育所」のお話を聞いて以来のお付き合いです。

それは1950年代から60年代にかけての女性労働者の闘いによりそって研究・実践してきた歴史でもあったことがわかります。

橋本さんの豊かな実践と研究活動が、「55歳で初めて正規雇用」を実現し、熊本学園大学教員となり充実した研究生活を経て定年を迎え、その後の充実した生活・活動がさらに広がっていく様子が書かれています。

橋本さんのお人柄がしのばれる多くの写真に彩られ、読み進むうちに50年代から今日にいたる女性労働者の運動を辿ることができる貴重な「自分史」でもあります。

（注）国連グローバル・コンパクトとは

国連グローバル・コンパクト（UNGC）は、各企業・団体が責任ある創造的なリーダーシップを発揮することによって、社会の良き一員として行動し、持続可能な成長を実現するための世界的な枠組み作りに参加する自発的な取り組みです。UNGCに署名する企業・団体は、人権の保護、不当な労働の排除、環境への対応、そして腐敗の防止に関わる10の原則（原則6:＝企業は、雇用と職業における差別の撤廃を支持すべきである）に賛同する企業トップ自らのコミットメントのもとに、その実現に向けて努力を継続しています。